



「下村満子の生き方塾」ニュース

【号外】2019.10

— 2019年8月合宿速報版① —



「下村満子の生き方塾」を主宰する下村満子塾長は、8月23日から26日まで行った夏合宿のメインテーマ「福島第一原発事故現場と放射性汚染土中間貯蔵施設の視察」をした感想を、『原自連メルマガ46号』に書きました。塾長曰く、「かなり長い原稿で、私はめったにこのような原稿は書かないので、塾生の皆様やOB、OG、応援団の方々にも読んでいただきたい。ニューズレター夏合宿速報①は、『福島第一原発事故サイトと中間貯蔵施設を視察して考えたこと』と題した、塾長の渾身のレポートを全文掲載します。

(写真・構成 / 皆川猛)

「疲れた」「虚しい」「徒労感」

— 第一原発事故現場 塾長が渾身のレポート

● 「アンダーコントロール」の嘘を知ってほしい

先週末（2019年8月23～25日）、私が主宰する「下村満子の生き方塾」は、福島県楡葉町のJビレッジに2泊3日し、夏合宿をした。塾生40余名を引き連れ、今年8月からやっと廃炉作業が始まった福島第一原発（F1）の視察と、8年間の除染作業の結果、居住地域の庭先や田んぼなど、至るところに、黒い袋に入れられ積み上げられていた膨大な汚染ゴミの「中間貯蔵施設」と称する敷地に入り、現場を視察した。この「中間貯蔵施設」は、環境省のコントロール下にあるが、ここに入る許可を得た民間グループは、私たちが初めてだと言われた。

F1に入ったのは、私は、これで2度目である。その時以来、オリンピックに向けて安倍首相が発信した「FUKUSHIMAは、Under Control」という言葉は、「全く嘘」という現実を、塾生たちに体験させたいと思ってきた。今回、それがようやく実現した。

「生き方塾」の応援団の1人であり、塾生でもある株式会社エイブルの佐藤順英社長は、現在、福島第一原発の、世界に類を見ない困難な廃炉事業の先端を担っており、大変苦労している。通常、こうした大事業は、ほとんど大手ゼネコンが請け負っているが、エイブル社は、F1から15キロほど南に位置する地元広野町に本社を置く、地元企業である。もともと、原発事故の起こった大熊町に本社があったが、事故で全てが吹っ飛び、全てを失った。が、地元を何とか復興させたいという強い思いで頑張っており、「報道ステーション」でも紹介されている。

そうした佐藤さんのツテもあるので、以前から、なんとか塾生たちに「現場」を体験させたいと、2人で話し合っていたが、今回それが、やっと実現した。ただし、東電からは、40人以上は受け入れられないと言われていたので、今回の合



原発の廃炉作業、中間貯蔵施設など視察し、エネルギー問題について理解を深めた「生き方塾」夏合宿

宿は、申し込み先着、40名までとしたところ、2日間で、あっという間に定員に達し、参加できなかった塾生も沢山いた。

吉原毅原自連会長、佐藤弥右衛門さん、湯川れい子さんは、いずれも私の「生き方塾」の応援団になっていただいているので、参加をお呼びかけした。皆様、事前勉強会や、視察後の勉強会では、それぞれ大変インパクトのあるお話をさせていただき、塾生たちに沢山の学びと大きな影響を与えて下さった。

吉原さんも湯川さんも、私よりはるかにフットワークが良く、すでにそれぞれ素晴らしい一文を原自連に寄せておられるので、今頃私が、と思ったが、「生き方塾」は、東日本大震災及び福島原発事故が起って、わずか1ヵ月後に、「命とは何か?」「生きるとは何か?」という、「人間の根本問題」と向き合う塾として、両親の故郷、先祖伝来の地である福島で立ち上げたものであり、「日本人の『心の再生』と『地方の再生』

なくして、日本の再生はない」という強い思いから始めたものだった。福島のDNAが100%の私にとって、原発事故は衝撃的だった。が、壊滅的になった福島は、ちょうど敗戦後

の日本のように、新しい日本を生み出す1つの契機になり、原動力になるかもしれない、という前向きな期待も持った。

中間貯蔵
施設

大手ゼネコンの「稼ぎ場所」



地面を掘る下げ、そこに汚染土壌を埋設する。何とも空しい作業だ。事故さえなかったら発生しない作業だ

●民間グループで初の視察

あれから8年半、私にとっては、2度目の、丸1日の、F1視察体験だったが、まず一言で感想を述べるならば、「疲れた」「虚しい」「一体、ここで行われている事は、何なんだ？」ということだった。「疲れ」は、肉体的なものではなく、「精神的な疲れ」だった。

「中間貯蔵施設」というのは、皆様ご存知の通り、放射能で汚染された莫大な除染ゴミを、30年間置いておく、「仮置き場」である。しかし、この「仮置き場」をどこにするかを決めるのに何年もの時間がかかり、その間、汚染ゴミは、いたるところに積み上げられて放置されていた。ようやく、この1、2年、少しずつ「中間貯蔵施設」への運び込みが始まったが、その場所は、放射能汚染がひどく、ほぼ永遠に帰還できない住宅地や田畑などの広大な土地で、説明によると、東京ドームが350個入る位の広さ、別の説明によると、渋谷区全体位の広さだということだった。「施設」という言葉のイメージとはまるで程遠い、人の住めなくなった、人が近寄ることのできない、隔離された広大な地域、といった方が当たっている。

私たちは、その広大な地域の中を、バスで移動しながら視察した。大型トラックで運び込まれる汚染ゴミを、燃えるゴミ、石ころのようなもの、土などに仕分け、燃えるゴミは焼却され、土は盛土として15メートル位の高さに積み上げられていく。



大型ダンプが駐車する貯蔵施設

30年は持つという丈夫なシートを敷き、その上に土を盛り上げていくので、汚染が下に漏れることは無いという説明だった。

汚染ゴミを全てここに運び込むのに、2023年位までかかるとのこと。ここは中間貯蔵施設なので、ここに埋め立てたすべての汚染ゴミを、30年後までに（実際には、すでにこの施設が開設されて5年目になるそうなので、説明員に言わせると、25年後だ）この広大な土地に盛られたすべての土やその他の汚染ゴミを、別のところに移動させるなど、誰が考えたって不可能としか思えない。

「そんなこと誰も信じないでしょ。嘘だとはっきりわかっていることじゃないですか。渋谷区ぐらいの広い場所をどうやって、どこに探し、この膨大な汚染土や汚染ゴミをどうやって掘り返し、どうやって別の場所に持っていくのですか？ 結局、ここは『中間貯蔵施設』ではなく、『永久放棄地』になるのですよね」と言ったら、その説明員は、何も答えず、ちょっと笑っていた。

「中間貯蔵施設」の視察で、もう一つ印象的だったのは、この広大な領域のあちこちで、大きな建物や設備を作り、巨大なクレーンや機械、その他の機器を使って作業をしているのは、全て、鹿島、清水、大林といった大手ゼネコンであることだった。結局、こうした原発事故の後始末は、大手ゼネコンの「稼ぎ場所」となっている、これまでと変わらぬ光景だった。ここで毎日、4000人余の人々が働いているという。

原発事故後始末のために8,000人が働く現実

●再稼働論者に「人間の心」ある？

天井なしの莫大なお金と（およそ毎年 2000 億円のお金が、これら関連事業や地域に投入されているという）、マンパワーと人材、技術とエネルギーが、単に 1 つの原発事故の後始末、つまり、事故で生じた無限大のマイナスを、何とかゼロに近づけるための、果てしない作業に費やされているのだ。しかも現場の作業員や技術屋さんや担当者たちが、どんなに一生懸命、必死で働いても、どんなに頑張っても、決してゼロには到達できないことがわかっている作業だ。むしろ、やればやるほど、更なるマイナスが生じてくる。しかも、誰も、ここでやっていることを評価しない。気の毒なことに、何の罪もない、ここで働いている人たちも、評価されない。どんなにお金をかけても、どんなに人材や人を投入して頑張っても、何一つ生み出さない、非生産的な仕事である。モチベーションも出ようがない。

これだけの人と人材、技術、資金、エネルギーとパワーを、例えば自然エネルギーの開発というような新しい、未来志向型のプロジェクトや事業のために振り向ければ、どれほど多くのものを生み出すことができるだろうか、どれほど働く人々のモチベーションが上がり、やる気と頑張る気力が出てくるだろうか。おそらく無限に、生産的、創造的なものを生み出すことができると思う。

起こってしまった福島原発の安全な廃炉や汚染ゴミ、除染



水素爆発を起こした 3 号機には放射性物質の拡散を防ぐ力カバーが設けられ、核燃料の取り出しを進めている

ゴミの処理は、どうしてもやらなければならない。

しかし、これだけの壮大な無駄、喪失、犠牲、それも物質的なものだけではなく、命、心、家族、故郷、平穏でささやかな幸せ、こうした金銭では取り戻せない、目に見えない、人間にとって最も大切な「価値」を失った福島の現状と現実を体験しても、なお、原発の再稼働を主張する人たちとは、一体何なんだろう？ この人たちは、本当に「人間の心」を持っているのだろうか？ 私が、F1 の視察を終えて、精神的に疲れた、というのは、この虚しさ、やるせなさからくるものだったのだと思う。

マインドコントロールから目を覚ませ

●事故は人災とまで言うのだが

元東京電力の副社長で、事故発生後発足した、福島復興本社の社長も勤めた石崎芳行さんは、昨年同社を退社し、残る人生は、原発事故の起こった福島の浜通り地域の復興のために、これからは住民と共に新しい街作りを目指し、出来ることは何でもしたいと、地元に移り、地を這うような努力をしている、純粋な方である。福島第二原発の所長も務めたことがあるので、今回の合宿の、F1 視察の前日の勉強会で、事故当時の事や、東電内の事情をよく知る立場で、塾生たちに話をお願いした。

事故発生直後に、何百という身元不明の遺体置き場に連れていかれた時の気持ちを話し始めた時、石崎さんは、声を詰まらせ、話を続けることができなくなった。うなだれ、咽ぶように話を再開した石崎さんの姿を見て、私は心打たれた。その後、塾生との質疑応答になり、今後の日本のエネルギー政策について聞かれると、石崎さんは「やはり、当分の間は、様々なエネルギーの組み合わせの中に、原発は欠かせないと

思う」と答えた。石崎さんには、以前私も、このことについて質問したことがあるが、その時も同じ答えだった。

私は石崎さんを、人間的に大変立派な方だと思っており、東電を離れた後は、公の場でも、東電の内部体質について率直な批判をされているし、原発事故についても、不可抗力の事故ではなく「人災」であると自分は思っていると述べている。あの時の大災害の犠牲者の遺体を見たときの衝撃と悲しみについて、8 年後の今語るときにさえ、涙を抑えられないほどの優しい心の持ち主である石崎さんから、それでもなおかつ、「原発は当然必要」という答えが出るのは、私には理解できないのですが、と私は聞いたことがある。ちなみに、石崎さんは技術系の人ではなく事務系の人である。

辞めたとはいえ、元東電の副社長だったのだから、東電に遠慮して言えないのでは、と思う人もいるかもしれないが、石崎さんとはそれなりに長い付き合いでもあり、その人柄を知っており、「おかしい事は、おかしい」と、ソフトだが頑固な口調で言う人なので、これは彼の信念なのだと、私は理解した。

吉原さんは、「ああいう善良な人が、ああいうことを言うと、マインドコントロールされてしまうので、かえって危険ですよ」と私に漏らしたが、逆に私は、東電の中になると、石崎さんのような人でさえ、マインドコントロールされ、なか

なかそこから出られないのだから、ましてや一般の日本国民が、「原発マインドコントロール」から目を覚ますのは、容易ではない、とつくづく、心から思った。

「自然エネだけでやっていける」キャンペーンを

● 「知らなすぎ」を再認識

原自連は、一般の人々に対する、「原発なしで、私たちがその気になれば、自然エネルギーだけで充分やっていけるのだ！」というキャンペーンにもっと力を入れるべきではないか、というのは、以前から私が感じていたことではあるが、今回の合宿で、かなり優秀な、社会的にも活躍している、20代から70代という世代にわたる私の塾生たちの、原発や自然エネルギーについての「知らなすぎ」を改めて知り、塾長である私自身恥じると同時に、トシである私はかなり疲れたが、塾生たちの感想文を読むと、一人一人が「人生観が変わった」「これからはもっと原発や自然エネルギーのことを勉強し、未来の日本を自分たちの手で作っていかうと思った」「もっと、行動や実践をしていく」といったことを書いており、合宿が大きなインパクトを与えたことを知り、F1視察の合宿をやって本当に良かったと思っている。

吉原さんに教えて頂き、「文芸春秋」9月号の「福島第一原発は、津波の前に壊れた」という、元東電の、炉心屋といわれる木村俊雄さんの一文を読んだ。大変説得力のある、ほぼ100パーセント間違いないと思われる内容だと思った。私の塾生の1人に、合宿前にこれを読んできた者がおり、かなり興奮気味に、この「文芸春秋」の記事の内容を、彼の発表の場で語った。

津波の前に、地震ですでに、福島第一原発は破壊されていたとすると、津波対策に多大なお金をかけ、それをクリアすれば再稼働はOKだと思わされている日本人は、完全に騙されていることになるし、命の危険にさらされていることになる。

原自連がやらなければならない事は、山のようにある。しかも、これは時間との勝負でもある。



中間貯蔵施設内にある旧熊町小の校舎。放射能汚染がなければ、放棄されずに再建できたはずだ